

こんな茶番劇……ちよ、待てよ？

まだ10歳にも満たない頃だ。私は、人に対する態度によって自分の性別は自由に選べる、というイメージを持っていた。『美少女戦士セーラームーン』より『ドラゴンボール』や『スラムダンク』に夢中で、その世界で闘うことを夢想したり、着ているものも髪型も、当時の写真を見るとまるつきり、男の子だ。どこへ行ってもボクちゃん、お兄ちゃんと呼ばれ、「マリコなんて名前だから女の子かと思った」と驚かれることもあった。そんな調子だから、「好きなようにしている」と自分は男の子と思われるのなら、男の子、なんだろうし、そちのほうが楽に振る舞えるな」と感じていたのだ。もちろん言葉使いやなんかは、TPOでそれなりに注意されもしたけれど、基本的に周りの大人たちは「ヤンチャな子だね」と笑ってくれていたし、学校のクラスでも、そういう子として男子とも女子とも付き合っていた。

しかし、小学校も高学年になった時に異変が起こる。比較的大人しい男子……その子の家には最新のテレビゲームやなんかがあつて、みんなで遊びに行ったりもしていた仲だったのだが……、年上の兄（ヤンキー）の影響からだと思われる、曲がった性的な知識をひけらかすようになって

たのだ。新しい玩具を得たように、男子たちはそれを使って女子たちをからかった。喧嘩もスポーツもわりと強めだった私ですら、その例外ではない。性的な単語にもじること、まずは名前を壊された。漫画やテレビで見聞きしてなんとなく意味は察していたが、わからないふりをしてやり過ぎそうとすると、今度は穿いていたズボンを下ろされそうになったり、やや膨らみ始めた胸にバスケットボールをぶつけられたりした。痛かったけれど、その痛み自体が謎で怖くて、「いってえな！」と叫びながら投げ返す。

彼らに極端な悪意があったわけではないこと、新しい遊びが始まったに過ぎないと、わかるのが一番辛かった。

私は大きな勘違いをしていた。私は、男の子ではない。

去年の夏、10年ほど付き合っているパートナーの母親が倒れた。その前の年には父親が亡くなっていて、現状一人暮らしであった。彼女は好奇心が強く闊達な性格で、ラジオで勉強して覚えたというフランス語を駆使し、後期高齢者だというのに1ヶ月以上もの間平気で日本を留守にするような人であったから、私たちはただ大慌て。検査の結果はなんと末期癌で、そう長くはないということだった。本人は「充分楽しく生きましたので、延命治療など結構」といった調子で、ホスピス行きまであつという間に決まってしまう、こつちもショックを受ける暇もなく身辺整理のあ

れこれを手伝うことになった。

コロナ禍真っ只中のことだ。感染する恐れがある高齢者とはむやみに会わないように、という注意喚起が出ていたために、電話口での安否確認のみしていた。数ヶ月ぶりに訪れた住み家の居間を見渡して絶句した。モデム。インターネットのモデムである。あれがなんと、3個あった。しかも、全部ランプが点灯している、つまり稼働している。もちろん彼女はPCもそれなりに使いこなす人ではあった。私は機械には疎い。しかし、3個はいくらなんでもおかしいことくらいはわかる。恐る恐るごっそり溜まった郵便物をチェックすると、聞いたことのない通信会社から結構な額の請求書が来ていた。

「オカーサン絶対よくわかんないで色んな会社と契約しちゃってるよ、やばいよ!!!」

パートナーはギターと車の運転はべらぼうに上手いのだが、契約や数字、ましてやインターネットなどは母親以下の理解度である。私も渡世は下手糞であるが、とにかく「お問い合わせはコチラ」にメールをした。数ヶ月前から家のネットを使用していないこと、契約は切って欲しいこと。とりあえずそれだけ送った（ちなみに他2個のモデムは所謂大手の会社のもので、終末期医療などで本人の意思疎通が困難な場合、確認書類を送って返却するだけで解約が出来、支払いは請求されなかった）。返ってきた内容にまた絶句した。

「それでは滞納分、契約途中で打ち切り分の手数料など諸々含めまして××万円になります。モデムは1ヶ月以内に返却しないと×万円上乗せ致しますのでそこんとこよろしく」

……やっぱりこの会社は妙だ。そう思って、コールセンターに電話をかけた。懷疑心を膨らませながらも、あくまで淑やかに、この値段はちよつと厳しい、契約内容も不明瞭だし、そもそもこの状態で親族に支払い義務はあるのか、など聞いてみた。しかし相手も、穏やかな口振りで解約手続きのやり方、支払いの催促を繰り返すばかりだ。

「契約者はどのようにして契約をしたのかわかりますか？ 例えば電話勧誘だったか、訪問だったか……」

「ちよつと私どもにはわかりかねますが、支払いは××万円、今月末までによりしくお願い致します」

「要するに支払いに納得ができないんで、契約書のコピーを請求先と同じ住所に送っていただいても構いませんか？」

「ちよつと私どもにはわかりかねますが、支払いは××万円、今月末までによりしくお願い」

「あの、そちらコールセンターですし詳しくわからないというのなら、契約書を保管している会社のほうへ連絡を取りたいので、連絡先を教えてくださいでもいいでしょうか」

「ちょっと私どもにはわかりかね、」

「……家のものと相談して、後日かけ直します」

ガチャリ。わかった。完全に舐められている。これはパートナー氏にオラついてもらうしかない、と思った。……申し遅れましたが私はミュージシャンの端くれをしており、昔レーベルと揉めた時に「話し合いの場には、誰でもいいから男性の友達を連れて行くといい。それだけでビビって話は終わると思うよ」とアドバイスをされていたことがあるからだ。直接対面では無い、電話口なんだし、とにかく契約書を送れアホンダラ、と演技でもして吠えてくれと頼んだ。

「俺、自信ない。普通にキレて話ややこしくしちゃうかもしれない。アナタは声も低いし、もう男のフリして電話し直せばいいんじゃない？」

そういえば向こうに親族が男か女か何人いるのかは伝わっていないはずである。おもしろいやんけ。やっтарやないの。私はスーパーサイヤ人天才桜木モードになっていつそ燃えてきたので、後日、長男、という設定を内に秘め、電話をかけた。

「……あのさア、だから、この契約ちよつとおかしいと思ってるですよ、俺。ね？ アナタもさあ、何も知らないお年寄り騙して変な契約させる再現VTRとか見たことありますよね？ それ疑われても仕方ねーじゃん、こんな内容」

「あの、私どもはコールセンターということで、解約のご案内をさせていただいている部署でございますので、そういったことはわかりかねまして」

「それじゃラチあかねえつつってんすよ。契約書、保管してないワケないっしょ？ おたくに無いのはわかんだよ、ガチで契約してる会社の連絡先教えろつつってんすよ、わかります？」

……隣でパートナーは時たま吹き出している。俺だって笑いてえつつのこんな茶番劇……ちよ、待てよ？ 喋る間に含み笑いみたいなの入れたら、……より怖くない？

「け、い、や、く、しょ。な？ 送れって。どこに頼めばいいんすか。ふっ。自分、どこの会社から請け負ってこの仕事してんすか。はは。その会社名と連絡先教えてくれりゃいいつつってんだろ、別に難しくないっしょ」

「……少々お待ちください、上に聞いて参ります」

「あーハイハイ、最初からそーしてください、だから。お願いしあゝす」

保留音でラピュタのテーマが流れ出した。動いた。やった！ と私はパートナーにガッツポーズをしてみせる。すると、神妙な顔をして彼は、

「なんかさあアナタ、……何かに似てると思ったら」

キムタクみたいだったね。と、言った。

当然、丁寧にしか対応できない電話口の頑さに対して、こちらも同じように丁寧な返しをしていると、上滑りのままぐるぐると同じ順路を辿るばかりで疲弊する感覚があった（そして疲弊させることこそ、アチラの狙いであるように思われる）。ところがこんな風に「舐めた口調」にすると勝手に「強い人」になれたような、いっそ快感があった。「強い人」の声は実際に人を動かしてしまうのだ。お話目的でコールセンターに電話してしまう「メンドくさい人」も、この快感がクセになるのかもしれない。更に言うと、「舐めた口調」の女性版というものを、自分は想像できなかった。完全に「キムタク」そして喋った方がはるかに楽である。もちろん、「女性なのではないか」と不審に思ったかもしれないが、建前上「お客様、失礼ですが性別はどちらでしょうか」などと聞けるわけがないのである。Dear WOMAN……女性読者の皆様、もし電話での問い合わせでこのような事態になったら、是非「キムタクっぽい喋り方」をブン回して次への扉を開けて欲しい。Welcomeようこそ日本へ……、「女性」のままでは、この国では契約書の一つもスムーズに送ってもらえないのだろうか……私、何が悪かったのかしら？

かくして契約書的なものは偽キムタクの手元に届いた。ここでようやく、消費者センターに相談することが出来る。色々と調べたところどうやら電話勧誘で、前のプロバイダとの解約も自力でしなければならず、お年寄りが使いこなせるはずもない超高速インターネットを高額で契約さ

せていたようだった。そのためモデムが複数存在する事態になり、それぞれの会社はずっと彼女は支払いをしていたのである。ちなみに後期高齢者が相手の場合、親族に確認をとってから契約をさせるのが常識であるのに、それをしなかったこの会社には不審点がある、とのことであつた。センターの相談員さまの御尽力で結局半額になったのだが、未だ払っていない。払わなかったら弁護士事務所がやってくるらしいので、せっかくなので次も偽キムタクが話を伺ってみてから、社会勉強代としてお支払いすることを考えている。

こんな様子を見て、今は天国に住む彼女が、面白がつてくれていることを願う。

明らかな冗談はTwitterで応えますんで

15年休みなく動いたバンドは2020年に入って活動休止となった。振り返れば結成当時、ガールズバンド、などとわざわざ分類されることに私は辟易しており、大抵黒ずくめで黙々と演奏するスタイルで、それでも「もっと自分たちのルックを売りにしたら?」「ジャケットにどうして顔を出さないの?」とよく言われた。CDショップなど見渡せばわかるだろう、女性のミュージシャンの顔ジャケ率の高さ。「女性のミュージシャンってだけでお客さんがつくんだから、利用しない手はないよ!」。なんの悪気もない、ごく普通の意見だ。つまり「売りたい」のなら、愛想よく物販をやって、顔を出したジャケットにし、女性であることをもっと単純にアピールするべきなのだ。しかし私は、自分が思っかっこいいロックバンドの一部でありただただ。ただ音楽に磨きをかけようと、愚直にやり続けた日々。女性のファンが多い、と言われ始めた時は嬉しかった。彼女たちは「みんなイケメン〜!」と声をかけてくれていた。もちろん、まんざらでもなかった。

さてバンドは止まったものの音楽とは離れがたく、不慣れなDTMや、生配信も含めたギター

の弾き語りを始めた。配信アプリには「ギター女子」「宅録女子」「女性SSW（シンガーソングライター）の略」のハッシュタグが当たり前のように躍る。これを付けるだけで閲覧回数も再生回数も全然違うのだろう、と想像は容易かった。女子ってだけで見てももらえるからずい、とボヤク「ギター男子」や「宅録男子」は多い。それは事実でもある。音楽以外の目的で興味を持たれる可能性は出来るだけなかったもので、そういったハッシュタグやタイトルは付けなかった。それでも目ざとく見つけてくるのか、（たとえ褒めるものであっても）ルックスについてや、いきなりタメ口のコメントもごく稀にはあるが書き込まれてしまった。どうみても硬派にやっていたバンド時代でも、酒を奢ろうかと下心丸出しで声をかけてきたり、音楽の知識を試そうとする輩はいた。相手にすれば帰り道までずっとついてこられたり、断れば「お高く止まっている」とTwitterに悪口を書かれたり。「あの人は変な人で有名なんだから、もっと上手くあしらいなよ」と言われもしたが、なんでそんな人間チェックまで出来てないといけないんだよ（泣）、である。こういった状況になんの引っ掛かりも感じなかったり、逆にチャンスだと頑張る人を責めるつもりは毛頭ない。世間が「女性SSW」と分類したとしても、ただ私自身が納得のいく形で活動したい、また一から真面目にやるだけだ。

そんな中、とある女性SSWとイベントをご一緒する機会があった。「前から知ってます！

お会いしたかったです！」なんて話しかけてくれたが、年下の彼女のほうがソロアーティストとしてはまったく先輩である。てきぱき並べられた物販は充実しており、またそれがCD音源やグッズのみならず、ライブDVDまであるのに舌を巻いた。

「凄いですね、これ1人で用意するんですか?！」

「いやあ、実は、お客さんが勝手に作って持ってきてくれるんですよ」

こいつはタマゲタ。初めて出会ったシステムである。

「録音したのを編集したり、ジャケットのデザインとか全部やってくれて。ありがたいです」
す、すげー。

主にロックバンドが演奏する場所だったライブハウスに、ギターを抱えた女性SSWも登場するようになって10年と経たないほどであろうか。

「地下アイドル現場より女性SSW界隈のがやべえから」

男子の与太話に耳を傾けていたことを思い出す。

「チェキ撮って物販してる人もいるしさあ、地下アイドルとやってること変わんねーし、地下アイドルだって接触したい客相手にするキャバ嬢みてえなもんじゃん。なのに恋愛感情を抱くとか、パフォーマンスを評価しろとか言ってるの、おかしくないすかね」

暗に、きみもそう思うだろ？ と目配せされ、私はブチ切れたことがある。らしい。らしいのはもちろん、私がその時酔っ払っていたからである。

「ニイさんがすごい反論してたの、意外でした。てっきり彼に同調するかと思ってたんですよ」後日、そのやりとりを見ていたというライブハウスの店長は言った。

舞台上に立って歌ったり（踊ったり）したい、日常の自分とは違う人間、憧れの人みたいになりたい……一言では言い表せない気持ちを持って行動を起こすのは、バンドマンだろうが女性SSWだろうがアイドルだろうが一緒だろ！ と、私は義憤に駆られていた。女だからという理由で散々舐められた経験に立脚するものであると同時に、嫌な目に遭うことも知っているくせに「女子はそれだけで興味を持たれてずるい」と勘ねているバンドマンの側に自分が入れられたことへの屈辱もあったのだろう。「イケメン」と呼ばれて浮かれた私の、アンビバレントな拒否反応だ。かっこつけてんじやねーよ、と思われたかもしれない。それでも怒って良かった。店長はアイドルへのインタビュの仕事を振ってくれ、謎だった地下アイドルの世界の一端を知ることができた。

さて、今。ファンにビールを奢られ、一番めんどくさい物販を作ってもらい、売り上げも全て手に入る、という彼女を目の前にして、私はどう思っている？ 彼女のキャリアも知らない、ま

だライブも観ていないのに、ただ「ずるい」と思ってやしないか？ と内省しつつ観察しつつしている、あることに気が付いた。男性ファンたちは、彼女とかなり年齢が離れている人が多そうだった、にもかかわらず、話しぶりはまるで高校のクラスメイトか？ というほど気さくなのである。

「おまえさあ、いついつのライブの後泥酔してただろオ？ ちゃんと帰れたのかよオ？」
タメ口で彼女に話しかけている。そんなテンションで大人しく待っている他のファンにも絡ん
ていく。まるで青春アニメの冒頭シーンだ。やんちゃな美少女を嗜めるちよつと冴えない俺たち
といった雰囲気、といえば伝わるだろうか。申し訳ないが、なんだか寸劇でも観ている気持ちに
なる。多分このタメ口の人が物販作ってるんだろうな、あ、やつぱり。なんか包みを渡した。彼
女はペコペコとそれを受け取っている。うーん。やはり、これは絶対に大変である。確かに、接
触するにもしつかり金銭がかかるシステムの地下アイドルのほうか「あくまで商売である」と一
線は引きやすい。一方、女性SSWの場合は、ファンがボランティア的にしてくれていること、
と表面上はにこやかにやりとりする以外にないが「これだけのことをしてやったのに」と手の平
を返してくる可能性は多分にある。彼女のライブは立ち姿も堂々と、歌声、ギターもきらめいて
ショーとしての完成度は高く、ライブを楽しみたいのならこれで満足出来るはず、こちらも身の

引きしまる内容だった。しかし日増しにコロナは深刻になっていき、今もライブは中止になったり配信ライブに切り替わったりだ。私は有観客のライブからは一旦退いている状態であるが、彼女は相変わらずライブを続ける選択をした様子であった。そんなある日「Twitter」のTLを眺めていると、

「すいません！ メールアドレスのほうに、私への私信を送らないでもらえますか？ スタッフさんが困ってます〜！ けっこうんして〜！ みたいな、明らかな冗談は「Twitter」で応えますんですけど〜！」

これが最初、ではないかもしれないが、彼女のこんなツイートが流れてきた。ライブは一人でやりに来ていたはずだが、裏方業務をしているスタッフの存在をほめかしている。自分へのメッセージは他人が読んでいるぞ、とけん制しているように私には読めた。「けっこうんして〜！ みたいな、明らかな冗談」というフレーズからして、恐らく内容は勘違いした恋慕であろう。一発アウトで距離を取りたいところだが、ここで突き放してしまえば相手は逆ギレしかねない。「Twitter」で応答する、と表明することで第三者の目線を意識させ、ファンコミュニティ内で監視し合わせることが出来るのかもしれない。この流れは特に、アーティストに限った話ではない。会社で、学校で、男性を逆上させまいと、あの手この手で女性はトラップをかくぐる。それが

普通で、当たり前のように。スカートめくりは好意からだと言ふさがれ、思春期の男の子にはよくあることと下ネタを聞き流すことを覚え、上司からの執拗な食事の呼び出しを断るために架空の彼氏をつくって誤魔化すことと、何が違うのだろう。

そして、ここまで骨組みを明かされても暴走してしまいう人間はいる。「小金井ストーカー殺人未遂事件」。女性SSWをファンがメッタ刺しにした事件である。ライブ会場やSNSでの犯人の不審な行動について、被害者は何度も警察に相談していた。が、被害者の声明文を読むと警察がまともに動いたか疑わしいようだ。犯人は控訴を取り下げ、14年6ヶ月という、被害者が一生背負う傷に対して短すぎる刑に服しているが、その反省文を読んで戦慄した。彼にとつてはまだ他人事なのだ。曰く「あれだけの目に遭ったのにもかかわらず、彼女は自殺せずに強い」「彼女がまったくの善人ならこんなことにならなかった」……自分を惑わしたくせに、好意を受け取らなかったお前が悪い、で止まっている。「自分はダメ人間です」という認識でいるにもかかわらず、そのダメ人間像を直視できていない。そして、まともに対処しなかった警察も、嫉妬深いバンドマンも、この犯人も、根は皆どこか同じイメージを持っているのではないか。ハッシュタグをつけたくせに。チェキを撮ったくせに。男に勘違いをさせて、金や物を巻き上げるくせに。女はずるい、オッサンの俺は見向きもされない、女はそれだけでちやほやされる。好意への裏切りだけ

ではない。自分をただ無条件で受け入れて欲しいという幼稚さが、ある女性像をつくりだす。女という理由だけで社会に受け入れられている、その虚像の女性こそ、彼らの幼稚な姿そのままだ。「イケメンですね！」と励ましてくれた女性たちの言葉の裏に、そんなドロドロとした卑屈な感情を、私は感じたことなどないのだが。